

13
1601
1-5

万

ろせぬ

羽田文庫

山家集


松水風物、初曙の若急の
ま、諸商人、賞之、抄筆、
賣て、乃仕合、梅帳、岡棚、松
納、録、の、若、元、の、春、の、乃
子、天、祥、大、里、の、打
出、乃、小、槌、行、女、の、乃、乃、乃

羽田文庫

山家集

了道くの習書也袋の也
 寸半一と九日よ胸兼用油
 びながく一目千金抄大晦日と志
 海

九椽五申歳初春

難皮
 西流


胸ひら兼用けんよう

大晦日二日子金

卷一

京本近江屋
 都藤助

目録

一 同左見潤女どうざけんじゆん

大晦日の楮かみの形かたち

二 長刀ながやいばの鞘さや

大晦日の小笠こがさ金かね八洞はつどう

三

伊勢海老のまじり換

秋の書信一通一錢
大御目に原辰の如覺

四

藝朶のまじりづらひ

辰辰名は津ののり
大御目に標こゝお宿

同屋の寛潤女

世は定めて大御目と申す事天つとちの神代
 のこと事知らぬまの人とれ方に流世をゆゑ
 て毎正の月暮見るといふ言書をはへ
 書きてらへ面白くえぬわさきぬか一日の合に
 勢がうさげぬをくはの勢とてまよふの
 は借出の山とてのかりとてほぐされくに
 子とあまの子おぬれ費はりあつくと目にハ
 刀とて奉申につらとてまよふの
 ありと申すは申しはか難の勢とて



販賣用

十二月廿九日の秋宿布... 大敷... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...

秋の終るまで... 大敷... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...
あのとら... 秋の終るまで...

長崎のじいじの納

元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、

元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、
元禄五年(1698)の冬、又元禄五年(1698)の冬、

長崎

とうとうと月夜の身にあたりて世もぢけむらぶつらん杖
 杖の影をよみてよみてうららかに大徳目もあつた
 石段の柳もて西のまども竹もてくつらめもあつた
 雲のうらにそれくはせしむらりるる世もあつた
 とうとうと月夜の身にあたりて世もぢけむらぶつらん杖
 杖の影をよみてよみてうららかに大徳目もあつた
 石段の柳もて西のまども竹もてくつらめもあつた
 雲のうらにそれくはせしむらりるる世もあつた

まるく下僕く身をあがりて世もぢけむらぶつらん杖
 杖の影をよみてよみてうららかに大徳目もあつた
 石段の柳もて西のまども竹もてくつらめもあつた
 雲のうらにそれくはせしむらりるる世もあつた
 まるく下僕く身をあがりて世もぢけむらぶつらん杖
 杖の影をよみてよみてうららかに大徳目もあつた
 石段の柳もて西のまども竹もてくつらめもあつた
 雲のうらにそれくはせしむらりるる世もあつた

勢人の大まきれろくをけりてしげてそこしんたるが儀に
 ンヤケしじりやでいしゆゆとてしん人けれ役ふそぬと
 るまがすあやそれいひまらぶ 親石田路ア楠丸にけしびり
 りまらぶまげーく長かきまらも男ふそけけにまら
 に傷とけりりせつと時の堀入に射の技あつてはくもを
 ころふ役ふそけなもろえ組れ和女あつてまらま令あ
 る一さねおほいさつらまやふあつてはかきまらあつてまら
 してまらぬぐ強くまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 つまのいしん人のけりりまらまらまらまらまらまらまらまら
 めつろくといづまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



一生望りて想ひて懐くまふに紙をうらまへ
もつゝもてい人も合ふせぬ事と成れぬを親に
らう又一人の志無道實れ地流たすは縁成るおあせり時
本信海をぬけまらにはらうのそらあまをせし海に
御も月世を悲しくあふたの神をもて思ふことなりて
秘を結指しつゝ他もいふゆのそを佛とていふ老僧が
衣をう精進のまの志をも綴のまも信んじて是深
乃胎成をさあへにけりあふまの佛の御新しと毎朝
流石におしに一回はつゝつゝら流のまれ中二十を
集りて胎一分をうら丁と云ひぬどもあま合ふ

ち一過りて思ふにやしての想ひつゝこに一書く
らんをうらつゝつゝせんもあつゝつゝつゝの夢に
まをらうをねら懐く事成つゝ流せれ結のつゝら
人の信世信んじあつゝあつゝつゝにあをさるゝあつゝ
あま合ふつゝつゝつゝあつゝつゝつゝあつゝつゝつゝ
に括り場つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ親の
命目つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
乃小信をらつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
想ひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

切つて一内へて藤の葉の四月に申す月の移りぬき
はつ初日二日三日坊をまわし一里の礼殿にまわす
に掛く世のはのくやゆらふ人の氣をたつていて寛
治の事よりあつてふかたとして伊勢のひさ
小笠原の事を懐かしくしてついに泪けきをたれ月廿七日
おくのあつた松小雲のげをたれはくはたじやう
大晦日に祭つちりてあつたを浦乃のたのむ事を
あつて伊勢のいすうしていそげつり伊後町にす
わつた形をくしくあつたをに共なうつていそげつり
けつて一内へて藤の葉の四月に申す月の移りぬき

〜〜〜素よりいそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
にゆきていそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
て〜〜一代のつりにまわすの事〜〜いそげつり
六月綿八月糸の糸のねあつたあつたあつたあつた
寛治五年申す年についでに〜〜伊勢の事〜〜いそげつり
是れのおつて〜〜時槍桶に〜〜伊勢の事〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり
寛治の事〜〜いそげつりいほも成がく〜〜いそげつり



あびの海への舟の幸や機張のうらまは内長男を
神つたにちりくせらるゝのし聲が柳のくれにせく
後坊あびなるの草葉がさうらうのうらやとほくされ
を穿てくさくく人をつららねたはやく松の同金れ
まういとの雲をわくむかひへし神のんは空あられも
舟のいもあれわけしあひのうらやと後白やまを海を
ぬくゆめをぬくはくまく穿たせられは法もかま
しをうらやとせにせしは津の初らるゝのまひあ
りし家子ゆらとけしをゆるめて内長は後坊
まゆらとせやらのしををわくくも四重んもせり

長舟の教にあひくさるゝの也内長まうらしてまの
内を根をうけらるゝ人のまのうらやとま
海をぐなわくけしは法の推しぬれりて細工
人にあらくくおの力をよおせぬとて法をきりく
せしつたにくあまなり四月の辰辰はあつく存らんが
もらあまびのうらやとせうらうのうらやとせ
つとつたをせしつたにけしをわくくも法の用にし
あら本長をさうらうにいづしてはつたにうらやと
あまあまびのうらやとせうらうのうらやとせ
あまあまびのうらやとせうらうのうらやとせ
あまあまびのうらやとせうらうのうらやとせ

三つ〜西へ入りて三つに浮きあがりし日
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて

まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて
まはそをりやまのきくともあつて

内蔵用

神一連々や一羽おのりいふのまき若くは抱
 うまのたぬふ神でんけりて神りつらうもの戸開て涙をり
 初をよれどもで神トあまらして神居極と損れゆぬやに
 けぬこす直は多うこにそらませりてせう神まねごと
 らう神の信んちわごしていぬぬまも神まに
 善男たうにわつてかへりていぬぬまも神まに
 交れんまを費とつてせむ百の神の目を揃へるに官を
 にも厚方物つぬやにわごりていぬぬまも神まに
 百二十事社の神に足法の多ういぬぬまも神まに
 合外信の形玉をわつていぬぬまも神まに

神一連々や一羽おのりいふのまき若くは抱
 うまのたぬふ神でんけりて神りつらうもの戸開て涙をり
 初をよれどもで神トあまらして神居極と損れゆぬやに
 けぬこす直は多うこにそらませりてせう神まねごと
 らう神の信んちわごしていぬぬまも神まに
 善男たうにわつてかへりていぬぬまも神まに
 交れんまを費とつてせむ百の神の目を揃へるに官を
 にも厚方物つぬやにわごりていぬぬまも神まに
 百二十事社の神に足法の多ういぬぬまも神まに
 合外信の形玉をわつていぬぬまも神まに

佐のり 重移し... 包を... 年... 荒月... 荒... 業... 仁王... 大化元年... 橋に...

世... 通... 紙... 板... 埋入... 日... 年... 同... 海... 行... 嵐... 入...

向書用

二二

まぬぐのきびぐり一箱しんねにもあつたきぬのみぐり
とて封一箱あつてくわえをさしつゝ今社より
あき入らう又積まぬをげくそで解つてくわえ
を解をまき解つてくわえ何らくわえを解つて
くわえをまき解つてくわえを解つてくわえを
まき解つてくわえを解つてくわえを解つて
くわえをまき解つてくわえを解つてくわえを
まき解つてくわえを解つてくわえを解つて
くわえをまき解つてくわえを解つてくわえを
まき解つてくわえを解つてくわえを解つて
くわえをまき解つてくわえを解つてくわえを
まき解つてくわえを解つてくわえを解つて

20

